ミカちやんは、また座りこみにゆくとよ

▼…まだ中央のはいえないまでも、もって生まれた天性のあどけなさが終始主婦たちの心を明るいものにし、団体交渉の場で問題として提起されてもいないのに、会社がCO患者に会社が勝手に行なうという着到に応ずるよう強要したことに対する抗議などのために、三川鉱人事に座りこんでいたCO家族の主婦にまじって、美佳ちゃん（CO患者の田中一也さんの次女）という満三才になったばかりの女の子がいたことが、話題を呼んでいる。

あたしのおうちはここ

▼…美佳ちゃんは、お母さんの正子さんと行動をともにしたのだが、座りこんでたたかう主婦たちの団結の推進力だったとも言えよう。

▼…美佳ちゃんが「家に帰ろう」といったのは最初の晩だけのことで、次の日からは、私服や転制が「おフロにもはいれずかあいそうばい。嬢ちゃん早よオお家に帰れよ」といやみをいうと、さっそく「いま人事がミカちゃんに、お家に帰れというたつよ。だからミカちゃんは帰らんていうたもん」と、みんなの耳もとに告げてくるようになった。それどころかある人が「美佳ちゃんのおうちはどこ？」ときいたのに、断固として「ここ」といってのけて、みんなをアッとおどろかせたのだった。

口紅をつけてしあわせに

▼…美佳ちゃんは、座りこみの主婦たちにとってなくてはならぬマスコットだった。だれかがオシロイと口紅でお化粧をしてやると、こんどは別のだれかが、ありあわせの紙で花をこさえては、美佳ちゃんの髪に飾ってあげた。

美佳ちゃんには、バナナやキャラメルの差し入れもあった。座りこみの主婦たちは、お互いにフトコロから金をだし合って大きな歩く人形をカンパした。

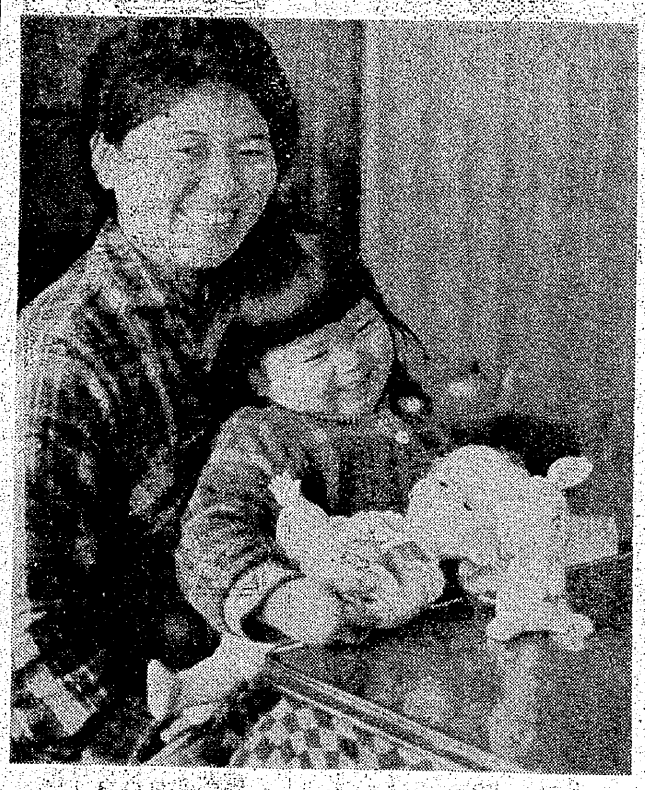
闘いの場に咲く花こそ

美佳ちゃんはこうして座りこみの内外からの温い愛情につつまれながら、夜などガランとしたあの三川人事の部屋を、天真ランマンに飛びまわった。いまや座りこみの場所こそが、美佳ちゃんにとってはしあわせいっぱいな世界だったのである。

美佳ちゃんはいま父母兄姉とともに、緑ガ丘社宅のお家ではしゃいでいるが、会う人ごとにひと口めには「ミカちゃんは、また座りこみにゆくとよ」をくり返している。美佳ちゃんはきっと、たたかいの場にこそ、仂く者の真のしあわせが花咲くのだということを、信じているのに相違ない。

×

本所前の座りこみは、つづいています。みんな機会をとらえては激励にたずねましょう。



美佳ちゃんの明るいおもかげ

母ちゃんが植えたキンカンの木

宮浦支部　平田光男

母ちゃん、あんたが植えたキンカンの木が今年も沢山黄色い粒を実らせ、余り手入れが行き届いたとはいえない庭を楽しませている。昭和三十五年のあの闘いの年の二十日市から買って来た母ちゃんは、幼いころの思い出が一杯つまっている木だというが真夏には白い小さな花を咲かせ、年の暮れには黄色く光る粒を沢山実らせる三本のキンカンの木は、きっと母ちゃんに複雑な感情を湧かせるに違いない。

思えば、はるか遠い幼いころの楽しい思い出にふけりたく思っても、千二百名の活動家を守るための首切り反対闘争が激しくたたかわれ、やがてその中から第二組合が発生し、隣り近所の仲間たちがみんな第二組合に走ってからというものは、ついに打ちとけた話もできなくなり、苦しい日々が続いたのだった。その苦しみは母ちゃんだけの、俺たちの家だけのものではなく、三池の労仂者全体のものだったが。

俺は、三池労組創立二十周年のための記念樹として、すだれ梅を買った。その俺たちの組合の二十周年記念日には、〝三池に学ぶ会〟に結集している人々が北海道から、また鹿児島から集まって来て、創立記念日を心から祝福してくれた。そのとき俺の家には、北海道からやって来た人が泊った。俺たちは母ちゃんともども学び合った。

記念式典の場で、三池労組ならではとても出来ぬ、三池闘争を綴った合唱詩劇をともに見ながら、怒りと感激を通して、劇が訴えようとしているものを肌で受けとめることができた。三川鉱の炭じん爆発のために、四百五十八名が目の前で殺されてゆく舞台を見ているうち、俺の側にいた誰かが思わず「畜生ッ」と叫んだ。俺の目はもうかすんでしまって、せっかくの舞台が見えなくなったものだった。久保清さんの死がそこへつながっている――俺はたしかにそう見た。

母ちゃん、キンカンの木を大切にしようね。母ちゃんの幼いころの思い出が一杯つまっている上、しかもあの闘争の時あんたが買ったキンカンの木だ。

あれからもう八年にもなる。その間害虫を退治し、肥料をほどこし、黄色に実ったその実だから、口にしたときの味は格別だ。

ほら、俺のすだれ梅も、この極寒に負けずつぼみをふくらませている。一輪一輪ほころびはじめては、暖かさを呼ぶことだろう。

俺のすだれ梅と母ちゃんのキンカンの木をともどもにながめながら、いつの日か子どもたちが、それらの木がもっている正しい深い意味をきっと知ってくれるに違いない。それもそれほど、待ちどおしいことはないだろう。

随筆

「詩」つぶやき

港務支部　柿坂　敏

つぶやきは
かたくなな老人の独り
言ではない
若い情熱のささやきで
もない

つぶやきは
自分が　自分に言い聞
かせる
詐りの無い言葉なのだ

つぶやく事の多くなっ
た私を
老人くさい癖だと
妻よ笑うな

つぶやきは
私が　私に話しかける
いちばん純粋な
人間の会話なのだ

誕生した文学誌〝坑〟

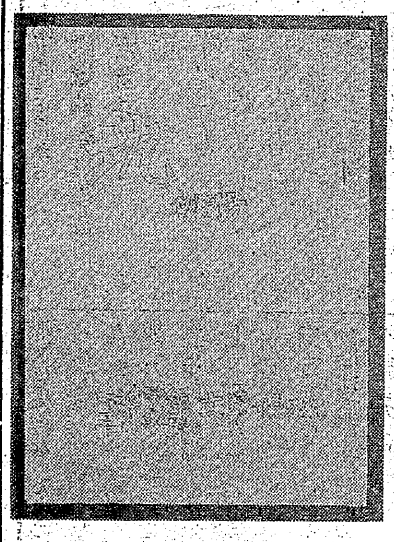
三川文学サークル　努力ついに実る

長い間発刊の準備がすすんでいた三川支部文学サークルの文学雑誌〝坑〟が、ついに誕生した。この誕生はすでに評価されている合唱詩劇〝みいけの闘い〟につづく三池炭鉱労仂者の文化的創造としても注目されるべきもので、会員の町義男さんが寄せた「発刊号に寄せる期待」の一節に述べられているように「三池は文学の不毛の地だと、誰かがいった言葉を返上する意味においても、このサークル誌の持つ責任は大きなものがある」。

三川文学サークル誌の坑には、十人の同人が稿を寄せている。だが創作と呼ばれる作品は、前田幸恵さんの「おとうと」だけで、他は「発刊号に寄せる期待」（町義男）、「川柳」（小柳重義）、「ある日の日記から」（月野貞信）、「古墳への道」（築紫次郎）、「俳句」（林田はつえ）、「短歌」（木村守）、「詩」（中原一）、「大きな目を」（前川哲也）「文学サークルのこと」（すぎもと・かずお）＝以上敬称略＝といったものだから、その点林しい。

しかしCO闘争、九・二八災害三川人事座りこみ――とつづいたたたかいのなかから、何がなんでもとにかく生みだされた〝坑〟は尊く、ぜひ守り育て、発展させてゆくために力添えをすることが大切であろう。

さいわいみんなの決意は固い。これからを大いに期待しよう。



文学雑誌〝坑〟

人間らしさを求めて

新労組合員の話

炭鉱に入って三年過ぎて、仕事のことや人間関係や、組合のことなどで言いたいことがいくつかあるが、一人一人がバラバラに腹の中で思っているだけではなかろうか。

いまから何十年も仂かなければならない、夢多いはずの若い私たちが、一日の仕事でグッタリとなって昇坑し、家に帰ったらコタツの中でゴロリとなって、テレビを見て寝る生活のくりかえしはたまらない。

会社帰りに寄った酒屋で、居合わせた同じ転場の、私より十幾つも年令の多い三池労組の人の気持の若々しさ。何処からともなく人間としての暖かさが感じられ、生活に対する態度にいろいろ考えさせられた。これは、三池労組員である以上この人だけではない。

会社が私たちに教えた三池労組観と、私たち自身一緒に仂き、常に接する上での三池労組観とは完全に違う。これは私だけでなく、新労組の誰でも言っている。

いまは本当のことが言えず、つきあえない空気があるが、しかしこの壁はだんだんと破れるだろう。私は最後にこれを言いたかった。

（宮浦支部甲方転場新聞〝めざまし〟から）

〝雑草のうた〟公演

―来年正月十六日―

統一劇場が市民会館で

▼…こんど大地評の後援のもとに、統一劇場の〝雑草のうた〟（劇＝二幕六場）が上演されることになった。

大牟田市民会館で、きたる一月十六日（火曜）の午後六時からの公演予定であるが、同劇団の大牟田公演に当って、この公演を成功させる会はつぎの要旨を訴えている。

統一劇場の仲間たちには、いつもびっくりさせられる。その声のでかさから、よく笑うことから。

想えば三年前、私たちにもおなじみの新制作座から不当解雇をうけたことを聞いて心配したが、労仂者の中できたえられてできたというこの芝居を見せてくれるというので、感動もひとしおだ。

雑草のようにたくましく生きる統一劇場の仲間たちに、大きな拍手を送りたい。

なお、この劇は、下請工場に仂く若者たちを描き、入場券は組合本部編集部にあり、二百五十円。